

# 彼女たちの日常(短編集)

\_Aster\_

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ゆずソフト作品のヒロイン達の日常を書く、そんな短編集のまとめです。

各話の前書きに注意書き等がありますので読んでいただくと良いかと思えます。

基本的にはアフター後、ネタ系はアフターではありませんが誰ルートでも無いものが多いです。

繋がりは基本的にはありません。ある場合は前書きにまた記述があるかと。

R-118とかも色々書きたいですよねえ…

# 目次

なでなであやせ	1
あやデレ	6
あやせとデート	13
媚薬スプリングラー羽月	18
暁's ホワイトデー	28
魔法少女ななみん	39
恋人の語らい(仮屋和奏)	53
あやせとラーメンを食べに行くお話	59
変わらない日常を(二条院羽月)	67
気丈な彼女(矢来美羽)	71

検索履歴(茉優・あやせ)	76
パッドを落としました(あやせ)	83
専属メイドあやせちゃん	89
梅雨の一日(あやせ)	93
外部取材(あやせ)	98
あやせとの休日	105
広報活動	111



## なでなであやせ

落ち着いた平凡な日の昼休み。俺とあやせは、いつも通り学生会室でお昼を食べていた。

突然だが、俺の彼女こと三司あやせは、他人からも認められるほど可愛い。俺ももちろん見るたびそう思っている。思っているのだが……

「あやせ」

「うん？どうしたの、暁？」

「今日も可愛いよ」

「……………」

少し顔をしかめてフリーズしてしまった。

「なに、急に。何か私に謝らなきゃいけないことでもしたの？」

少し顔を赤らめながらそう言うあやせ。そんなあやせを見て、今日はとことん攻めてみようと俺は覚悟を決めた。

「いや、単純に可愛いなあと。見るたびに惚れ直してるよ」

「……………ありがとう。でもほんとどうしたの？急に言われたらびつくりするんだけ

ど」

顔をほんのり赤らめたままそう言ったあやせ。俺はまだ攻める！

「確かに言ったのは急かもしれないが俺はいつもあやせを見るたびに思ってるよ。大好きだ、あやせ」

「ああ、わかったわかった！ほら、あと10分で授業始まるし、教室戻る？」

あやせは、たまらないといった調子で席を立つと、そう言つてドアの方に向かった。

「あやせ」

俺はその背中に声をかけ、引き止めた。

「なに？まだ何かあるの？あんまりそういうー」

振り向きながら、何か言おうとしていたあやせを、俺は抱きしめた。

「えっ、ちよっ、暁!?!ほんとともういい加減にしないと……!!私だつて、照れるつて言うか

……」

「ごめんあと少しだけ」

「……………しようがないなあ。少しだけだよ？」

俺があやせの耳元でそう囁くと、あやせは満更でもなさそうにそう言った。

俺は、あやせの頭を髪型を崩さないように気をつけながら優しく撫でてみた。

「……………んっ」

あやせは少しだけ声を出すと、目を閉じ、頭をこちらに預けてきた。

そうしたまま数十秒。撫でていた手をあやせの後ろ髪の方へと伸ばし、少しだけ腰を屈めると、俺は不意打ち気味にあやせの唇に自分の唇を重ねた。

「……………」

キスはほんの一瞬だったが、あやせは驚いて目を見開いたまま、固まってしまった。

「さて、いっつか！次の授業は、なんだっけな！」

俺はわざとらしくパツと離れると、素早く鍵を開け、学生会室から出てみた。

あやせはしばらくびくびくくりしていたらしく、俺が教室に戻った後、遅れて入ってきた。一瞬ジト目気味に見られた気もしたが、見返した時にはすっかりみんなの三司あやせの顔になっていた。

（ああーもう、もう！なんなのよ急に！しつこく可愛いとか好きだとか言うし！そりゃあ私だって好きだけど……）

私は、授業を受けながら、さっきの出来事を悶々と思いついていた。

（それだって限度があるでしょ!? あんな急に抱きしめてみたり……キ、キス……したり）  
そう。さっきの暁はおかしかった。普段あそこまでしてくることはない。

（まあでも、ぎゅって抱きしめられて、頭撫でられるのは……気持ちよかったけど……そういうえばキス、一瞬しかしてない……）

私がそんな感じでさっきの出来事を繰り返し考えているとー

「……三司さん？ぼーつとしていているようですが、大丈夫ですか？」

「はいっ?!」

私を呼ぶ声に現実に取り戻される。先生が名前を呼んでいた。

「すみません、少しぼーつとしていました。私はなんともないので、授業の続きをお願いします」

「そうですか……？それならいいんですが……」

「はい。改めて、授業の邪魔をしてしまい申し訳ありませんでした」

(あーもう！これも全部、暁のせいなんだからー！)

残りの授業の時間も、当然集中することはできなかった。

ー午後の授業も終わり、誰もいなくなった教室で一人座っている俺。携帯を開くと、一通のメッセージが来ている。あやせからだ。内容は簡素だったし、そもそも読まなくても内容はわかった。

『なにも用事がなければ、すぐに学生会室に来て』

授業が終わるとともに教室を抜けていったあやせがすぐに送ってきたのだろう。

それだけ書かれたメッセージは、俺の顔を綻ばせるには十分だった。まあ半分以上自分が差し向けたようなものだが。



あの感じだとかないりご立腹だろう。すぐに許してもらえらるだろうか。

俺は席を立つと、心はニヤニヤしたまま、あえて顔は平静を保って学生会室へと向かった。

## あやデレ

在原暁。私の彼氏で、主観を抜きにしても……そこそこかっこいいと思う。少なくとも七海さんや千咲さん、二条院さんに式部先輩からは好意的に接されている。七海さんは兄弟だから少し違うかもしれないが。

であればこそ、自分の彼氏が他の女の子といることに不安を覚えても仕方ないーと思う。嫉妬するのも当然、だろう。というか、そう思わないともう自分がしていることが恥ずかしくなってくる。私のわがままでただ暁を困らせているだけではないのか。(ああ……なんか不安になってきた……何やってるんだろ私……)

私は、寮の自分の部屋にいた。時刻は休日の真昼間。暁と一緒に何かしていてもおかしくない時間だ。だが、私は自分の部屋でひとりぼっちだ。こうなったのは私のーいや、暁のせいだ。

私は、朝食をとるため食堂へと向かっていた。暁とは、食堂の前で待ち合わせて一緒にご飯を食べる予定だ。

「あつ、暁……？」

私の声がだんだんと落ちていったのは、暁が式部先輩に抱きついていたからだだった。手を後ろについて、尻餅をついたように座っている式部先輩と、それを前から抱きしめるように覆いかぶさっている暁。というか胸に顔を埋めている。私の思考をフリーズさせるには充分な条件だった。

「……………おはようございます」

とりあえず当たり障りのない挨拶を試してみる。

「えっ、あつ、三司さん!? これは違って! 私がちよつと暁君を驚かせようとしたらこんなことに……………」

「あやせ!? というか、すまん! 茉優先輩!」

私が声をかけると、二人はワタワタして離れ、立ち上がった。どうしたらそんな倒れ方になるのだ……………という疑問は心の中だけに押し込めておく。

「分かっていきますよ、式部先輩。誤解なんてしません。どうせまた暁がなにかやらかしたんじゃないですか?」

「ちげえよ! 今回ばっかりは俺は悪くない!」

「そうそう! 三司さん、アタシが悪いの……………ちよつといたざらしたらね……………」

「そうですか……………じゃあ今回は、式部先輩に免じて暁を許します」

「俺が悪いのは変わらないのか……………」

「あはは……そ、それじゃあ朝ごはん食べに行こっか！」

これ以上空気を悪くする必要もない。式部先輩を信用しているのは本当だから。そう思った私はその言葉に頷くと、三人で食堂へと向かった。

「皆さん、おはようございます」

「おはようございます、あやせ先輩に式部先輩、それに暁君」

「先輩方、おはようございまーす！」

「おはよう。今日もいい朝だな」

「おはよう。時間かかったみたいだね？」

既に座っていた七海さん、千咲さん、二条院さん、周防くんと朝の挨拶を交わす。ワイワイガヤガヤと友達と一緒に朝ごはんを食べる。私の好きな時間の一つだ。

食事が終わって、食堂を後にする。

「ねえ暁、今日はー」

私は暁の方を振り向いたが、そこに暁はいなかった。よくみると、少し離れたところで同じクラスの女の子と話している。

「ごめんね在原君！絶対お返しはするから！」

「いや気にするな。楽しんでこいよ」

そんな会話を交わして、女の子の方は寮の出口へと小走りで行く。

「どうしたの？」

私は暁の元まで行くと、疑問を口にした。

「ああ、あやせ。なんでも、学院の先生に頼まれごとをしていたらしいんだが、彼氏との予定が急に入ってしまったらしくてな……代わりに引き受けてやることにした」

「ふうん。それって、すぐ終わりそうなの？」

「いや、これが結構面倒そうで、資料整理をしないとだから、時間がかかるかも……」  
「……………そう、なんだ。じゃあ、私部屋に戻ってるから」

私は暁にそうそつけなく言うのと、スタスタと自分の部屋の方に向かった。

「あつ、おいあやせ!」

暁の言葉が聞こえたが、私は振り向かなかった。

あの時の私はおかしかった。今となつてはそう言える。朝の式部先輩とのことで私もイタズラしてやろうなんて思っていたのもある。勝手に休日の予定をそつちにされちゃつて、嫉妬の気持ちもある。だが、それならそれで一緒に手伝えればよかった。

……ツンツンするだなんて、慣れないことはするものじゃないかも。

（あーもー……構って欲しくてわざと素っ気なくするなんて、付き合いたてのカップルか！そもそも私そんなキャラじゃないでしょ……）

自分の行動でここまで後悔するとは。私は連絡しようにもなかなかできなくて目の前に置いたままの携帯を見ながら、悶々と頭の中で後悔を繰り返していた。

ーノックの音は突然で、私は変な声を上げてしまった。

「ひゃい!?!」

「あやせ?俺だ」

「あ……………暁?」

咄嗟のことで、私はそんな返事をしたまま、固まってしまった。

「入っても、いいか?」

「あ、はい!どうぞ」

そんなかしこまった返事をしてしまったが、暁は気にせず部屋に入ってきた。

「すまなかった」

部屋に入ってきた直後、暁はそう言って軽く頭を下げる。私はまたしても、そう正直に謝られると、私の中の罪悪感がムクムクと大きくなる。

「うっ……………その、私こそ、ごめん。なんか面倒くさいことしちゃって……………構って、欲しかったから……………」

「恥ずかしさもあつたが、今はしつかりと気持ちを伝えるべきだ。私はそう思って赤裸々に自分の気持ちを口にした。」

「勝手に予定を入れてしまったこと……でいいんだよな？もちろん、埋め合わせは絶対にする」

「ううん。一緒にいてくれれば……それでいい」

「やっと言えた私の本音。やっぱり暁相手に気持ちを隠すなんて慣れないことはするものじゃない。そう改めて感じた。」

少し落ち着いて、一つの疑問が私の頭に浮かぶ。

「そう言えば暁、頼まれてたことは？結構かかるんじゃないの？」

「ああ……俺の能力の話は前したよな？」

「うん。脳のコントロールがなんとかで……」

「それだ。全力で校舎までダッシュして、脳の処理能力をあげてすぐに終わらせてきた」「えっ?! そんなことに能力を使ったの……? バカじゃないの?」

「いやバカはないだろう……」

驚いてそんなことを言ってしまったが、私は嬉しい気持ちでいっぱいだった。だって、それだけ暁がすぐに駆けつけてくれようとしてくれたから。そんなくだらしないことに全力を注いでまで、すぐにきてくれたから。

(はあ……やっぱり私は、あなたのことが好きなんだなあ……)



# あやせとデート

土曜日。あやせと一緒にライトレールに乗ってショッピングモールまでやってきた。  
「本当にここで良かったのか？」

「うん。そこまでおつきなお祝いじゃないんだし、遠出もなかなか疲れるしね。それに、その……私は別に、暁と一緒にどこでもいいし」

顔を赤らめながらそういうあやせ。こういうところが、何度見ても可愛いと思う。

あやせの取材や原稿の仕事が連続で入っていたのだが、それを終えた小さなお祝いということで今日はショッピングモールに来ていた。

「といつても、どうしよつか。特に予定も決めてないし……」

「まあ、ゆっくり散策するのでも良いんじゃないか？ なにか見たいものが見つかるかもしれない」

「それもそつか。じゃあ、いこー！」

俺の手を引き歩き始めるあやせ。その手は強く握られていた。

「あの、あやせ？」

「うん?」

「確かに見たいものを散策がてら見つける、とは言ったが……これは今じゃなくても良かったんじゃないか……?」

俺とあやせは、女性用の下着ショップにいた。正直男としては……とても居心地が悪い。

「それは、ごめん。でもちよつと聞きたくて。これとこれだったら、どっちがいい?」

あやせはそう言ってフリフリのついた可愛らしいブラジャーを指差す。正直どれも差がわからないのだが……というかこれだとサイズがー

「これだとサイズ違いだからあつちのスポブラはどうかなくて目を向けてるんじゃないわよぶつ殺すぞ」

視線が少し動いたのすら見つかっていた。

「いや、すまん。単純な疑問で馬鹿にする気はー」

「わかっている。わかっているんだけど……そういう仕草が見えると気に触るっていうかなんていうか……」

俺は、今度からは仕草も言動も、その予兆すら見せないように気をつけようと誓うのだった。

「はあ、はああ……かわゆい……」

「あやせ落ち着け！怖がつてるから！」

「はっ!?ご、ごめん」

ペットショップのケースの前でまた興奮しかけるあやせ。周りの目もあるし、なにより猫が怖がつてしまう。俺はあやせに落ち着けと呪文のように繰り返していた。

「でも……実際見ると、可愛すぎて……ああ、だめ、欲望を押さえ込んで……ふー……ふー……」

必死に感情を抑えるあやせ。ケースの前で身悶えながら蕩けた顔で猫を見ている人……はたからみたら結構まずいかもしれない。

「あやせ?そろそろ、行くか?」

「だめまって今ほらゴロゴロしてるの!ああ、もう!そんな生意気そうな顔して……」

既に猫を見始めて十数分。大声こそ出していないがあやせはずつとぶつぶつと言いながら猫を見ている。俺は早めに立ち去った方がいいかと判断したのだが、あやせはなかなかそこに離れようとしなかった。

——結局、ケースの前で三十分ほど身悶えていたのだった。

「うう……もつと見てたかったのに……」

「ま、まあまったくればいいさ。な？」

「うん……」

やつとの思いでペットシヨップのケースから引き剥がしたのだが、その反動なのか、ダウナーになっているあやせ。これは本当に変なクスリでもキメているのではなからうか……？

「あー、あやせ？ここ、見てみないか？」

「うん……？インテリアシヨップ？暁って、そういうところこだわるっけ？」

俺がダウナーだったあやせに指差したインテリアシヨップ。あやせの気を紛らわせるためというのもあったが、俺が少し興味があったのも事実だった。

「あっこれいいかも。これも可愛い」

可愛らしいインテリアを嬉々としてみているあやせ。気分は何とか晴れたようで何よりだ。

（だが可愛いと言ってるインテリアに猫の装飾があしらわれているのは流石というかなんというか……）

「？暁？ベッドなんて見て、どうしたの？」

俺もブラブラとしているうちに、いつのまにかベッドのコーナーに来ていたようだっ

た。あやせに言われた初めて気付いた。

「ベッドか。もうちよつと大きくてもいいよな」

「ええ？あれ以上大きかったら、暁の部屋には入らないでしょ？」

「いや、二人で寝れるかなって。今じゃなくても今後、さ」

「……………」

途端に静かになる。不思議に思った俺が横を見ると、顔を真っ赤にしたあやせがいた。

「それってその、結婚……………的な？」

「ああまあ、そうなるな。いやでも三人用とかの方がいいか？」

「それって……………!？」

さらに赤くなるあやせ。すこしからかうつもりだったが、効果は予想以上だったようだ。

「じゃあ、その……………とりあえず練習、じゃないけど、今夜、頑張る……………」

「えっ!?!あつ、そう、なるか……………?」

思っても見ない返しが飛んできた。俺は、自分の顔が赤くなっていくのを実感できた。

ベッドコーナーの前で、俺とあやせは二人して赤い顔で立ち尽くしていた。

## 媚薬スプリングラー羽月

「ん……よく寝た……」

目を開け、時計を見る。大方いつも起きる通りの時間だ。

俺は体を起こそうとする。

(……んん？いつもより体が重い……？)

昨日は仕事もなかったし、夜更かししたということもない。

(それに、体も熱いな……)

風邪気味なのだろうか。少し体調を整える意味も込めて、能力を使ってみた。

なるべく、いつも通り、体が落ち着くように――

すると、さっきまでの気怠さと熱さが嘘だったかのように体がスツとした。

俺は、いつも通りランニングに行くことにした。

ランニングを済ませ、寮へと向かう。ただ一つを除いて、不調や変わったことはなかった。だが、そのただ一つがとても気にかかっていた。

(二条院さんがランニングをしていないなんて……珍しいな)

俺は、そんなこともたまにはあるか、と自分を納得させながら察へと入った。

「七海。おはよう」

「あつ……お兄ちゃん。おは、よう」

ロビーには、七海がいた。

その様子はいつも通りローではなさそうだ。

（息が、荒い？それに目もなんかトロンとしてるような……）

「おにい、ちゃん？」

七海が消え入りそうな甘え声で近寄ってくる。これはまさかー

俺は、七海の両肩をガシツと掴む。

「ひああつ!?お兄ちゃん……?」

「七海。たぶん……風邪だ。部屋でゆっくり休め」

俺は七海の肩を持ったままその体をくるりと回し、上に行くように言った。

幸い今日は土曜日だ。一日ゆっくりしていれば少しは症状が軽くなるだろう。

「わ、かったからあ……手、痛いよ……」

「す、すまん」

俺はほんの少しだけ、七海のその言い方が扇情的だと感じてしまった。

（義理とはいえ妹だぞ?!一瞬でもそんなことを感じるなんて……）

「それじゃあ七海。俺も部屋に戻ってるからな」

「あつ……」

勝手に気まずくなつた俺は、七海から逃げるように自分の部屋へ向かうのだった。

「ふう……気が緩んでるのかもな」

部屋へと向かう通路で、俺は息を吐きながら歩いていた。

「在原君！」

「ん……？」

後ろの方で声が聞こえた。少し離れたところにいたのは、三司さんだった。

「ちよつと、手伝って欲しいことがあるんだけどいい……う？」

「うん？ああ、構わないがーーツ!？」

構わないと言った直後、強く引つ張られる。三司さんはそのままどこかへずんずん歩き出した。

「あー……三司さん？」

「ふーつ……ふーつ……」

荒い息のままフロアを上がり、向かっている先はー

(三司さんの部屋だな、あれ!?)



「一体どうしたんだ三司さん!? 落ち着け!」

「どうもこうもないわよ! 朝からなんか身体が熱くって……なんかもうウズウズしちゃって……とにかく! 解消するのを手伝って!」

「何言ってるんだ!?!」

何かがおかしい。明らかにいつも通りの三司さんではない。

(七海といい、みんなどうした!?)

俺が能力を使っても無理やり止めようかと思っていたその時。

「ストーツプ!」

「なっ!?!」

突如廊下に響く叫び声。三司さんは驚いた拍子に俺の腕を離した。その隙を見逃さず引いた俺の腕は――また別の腕に掴まれた。

「ふっふっふっ……暁君は貰ったよ! 三司さん!」

「式部先輩!? ちよっ……」

咄嗟に動こうとした三司さんだが、その体は固まっている。

(茉優先輩の能力か……!)

俺はそのまま、茉優先輩に引つ張られていった。

もちろん、何か言おうとしたのだが、能力でしっかり口元は塞がれていた。

「ふはっ……はぁ、はぁ……」

茉優先輩の部屋につき、能力が解除される。鼻で呼吸はできたが、なかなか苦しかった。

「助けられたな、茉優先輩……でも、ここまで逃げなくてもよかつたんじゃないか？」

「ふふふ……」

不敵な笑みを浮かべながらドアに鍵をかける茉優先輩。

（まさか……）

「さーとーるーくん」

「ストップ、ストップ」

ストップと声をかけるが、一歩ずつ確実に近寄ってくる茉優先輩。

そして十分に距離が縮まったところでー

「わっ！」

「っ！」

飛びついてきた茉優先輩。俺は咄嗟に能力を使って体を捻らせ、茉優先輩の後ろ側まで抜けた。そしてそのままドアの鍵に手をかけー

「開か、ないっ!?!能力か！」

「なあんで逃げるの睨くうん……」

「茉優先輩が明らかにおかしいからだ……!」

「ええ? おかしくないよお」

微睡みつつもこつちを鋭く見てくる視線、わきわきとしている手。どこをどう見ても普通ではない。

「逃げ場はないぞお……」

「すまん! 茉優先輩!」

俺はまたも能力を使用。茉優先輩に逆に近づいていく。

「暁君から来てくれるのーきやつ!」

茉優先輩を抱え上げ、そのままドアの方まで走る。

流石にアストラル固定技術までは使っていないだろう。つまりは、少し動揺させて能力を解除させればいいのだ。

俺は抱え上げた茉優先輩を素早く、それでいて怪我はしないよう床に置く。

くだらない行動だが、動揺させる効果はあったらしい。鍵が回り、そのまま廊下へと勢いよく出る。

「あつ……!」

「……ッ!」

俺が部屋から出たことに気づいた某優先輩。また能力で逃げ場を塞がれないよう、俺は全力で廊下を駆け抜けていった。

「ここまで、逃げれば……」

俺は寮から逃げ出し、中庭の方まで来ていた。

「うん？ 在原君？」

「ッ!？」

異常事態続きで気を張っていた俺は、突然後ろからかけられたその声に飛び退いた。

「どうしたんだ、そんなにびっくりして」

「ああ、二条院さん……」

俺の様子にびっくりして質問してくる二条院さん。様子からして二条院さんは異常がないようだった。

「二条院さん、その……なんともないか？」

「なんとも……? どうしたんだ一体」

「良かった……」

俺は思わず大きく息を吐いた。正常な人が自分以外に見つかった。それだけで俺は安堵していた。

「いや実はな——」

「みんな媚薬で発情したみたいになっていた、か？」

「んなっ!？」

一二条院さんの言葉が聞こえると同時に、視界がいきなり歪む。

(これは……水!?)

「ふふ……在原君、ちゃんと能力に気をつけないと危ないぞ？今君の顔は媚薬入りの水で包まれている。飲んでしまったら……どうなるかわかるな？」

「がっ!?!……………んん!？」

そう言われ咄嗟に息を止めるが、いつまでもそんなことができるわけじゃない。俺は水を飲んだ。

そしてそのタイミングで顔の周りの水は取り払われる。

「ぶはっ、はあっ!げほっ、げほ……」

「その薬は特別でな、すぐに効果が出る……在原君にだけ効いていなかったのは誤算だった、流石に直接これだけ濃い濃度を飲ませれば無駄だろう……?」

「二条院、さん。みんなにも、こんなことをしたのか……?」

「私が水を操れるのは当然知っているだろう?この媚薬入りの水を、ミスト状にして寮に撒いておいた」

「なんてことを……」

「さあ、話は終わりだ。そろそろ薬も回ってきただろう……う？」

二条院さんの言う通り、身体が熱い。疼いているのが自分でもわかる。二条院さんは、容易に俺を組み伏せ、馬乗りの姿勢になる。

「さあ、在原君。私に全て任せるんだー」

二条院さんの手が伸びてくる。こんなことはやめるんだ！そんな言葉も、飲み込んでしまう。俺は、目を閉じたー

目を開けるとそこはー俺の部屋だった。

「部屋……みんなはっ!？」

俺は、ベッドから飛び起きると廊下を駆け抜ける。だが、廊下にもロビーにも誰の姿もない。それもそのはず、まだ朝はかなり早い。いつもランニングに出る時間だったからだ。

だが、焦っていた俺はそんなことにも気付かず、なんとなくで中庭の方まで歩いてきていた。

そこには、二条院さんがいた。

「ああ、在原君。おはよう。今日はいつもより遅かったな？それに……パジャマのまま

じゃないか。どうしたんだ？」

キョトンとした顔でそんな質問をしてくる二条院さん。これはまさかー

「二条院さん」

「どうした？」

「媚薬って知ってるか？」

「びびびびび媚薬!? そんな、朝から、破廉恥な！ 在原君！ そういうことは夜になってからだなー いや、夜でもダメだ！」

どうやら夢だったらしい。いつも通りの二条院さんを見て安心した。

「二条院さん。散布なんてしちやダメだぞ。それじゃ俺は着替えてくる」

安心した俺は、自分の部屋へと戻り、着替えることにした。

在原君が去っていく。媚薬？ 散布？ 言っていることがわからない。破廉恥なことは……ないのか？ いやでも媚薬ってー

「一体、なんなんだー!?!」

## 暁 s ホワイトデー

「よし、これでいい」

俺は、自分の部屋でいくつかの荷物と向き合っていた。

今日は3月14日、ホワイトデー。幸い学校も仕事も特に予定なく休みだ。

ありがたいことにバレンタインには色々とお菓子をもらった。この数週間、お返しはしないと意思いつつもこういうことに不慣れな俺は、恭平や親父にも相談しながら色々品定めをしていたのだった。

(まずは二条院さんのところに行こう)

俺は荷物を持つと、二条院さんの部屋へと向かった。

ドアをノックする。

「二条院さん、俺だ。少し渡したいものがあるんだがいいか？」

「む、在原君？大丈夫だ、開いているぞ」

許可も得られたのでドアを開ける。中にはDVDを見ている二条院さんがいた。

「またこれを見てたのか……」



「む、違うぞ！これは最近出たばかりのブルーレイ版でなー」

「あー悪い、これ！」

長くなりそうだった話を無理やり遮り、持ってきた荷物を二条院さんの前へ差し出す。

「これは……?」

「バレンタインのクッキーのお返しだ。とても美味しかった。ありがとうな、二条院さん」

「そういえば今日はーホワイトデーか。すっかり忘れていた。こういうところが疎くて本当にダメだな……ありがとう、在原君」

ニコニコとしながら受け取ってくれる二条院さん。こういう顔をしてくれると本当にお返しをしてよかったという気になる。

「重ね重ね失礼かもしれないが、今開けても?」

「ああもちろん」

そうは言いつつもドキドキする。相手のことを考えて選んだつもりだが、お気に召すだろうか。

「これは……ブローチ?」

俺が渡したのは小さな箱に入ったブローチだった。もちろん、あやせと付き合ってい

る俺が他の女の人にこんなものを渡すのはどうかと思いましたが、だが、ちゃんと理由があった。

「しかもこれ、チヌ之介のじゃないか!？」

「ああ。俺も探して見てびっくりした。こういうのもあるんだな」

まさに二条院さんにピッタリ。値も張りすぎるといふこともないのでこれを選んだのだった。

「一応お礼には……なつたか?」

「ああ!もちろんだ!ありがとう在原君!」

目がキラキラとしている二条院さん。どうやら初つ端は上手くいったようだった。

「さて、こつちにはいるかな……」

俺が立っていたのは茉優先輩の研究室の前。部屋も訪ねたのだが、あいにく留守だった。

(休みの日までこつちにいるとしたら、ずいぶん忙しいんだな……)

俺はそんなことを考えながらドアをノックした。

「茉優先輩、いるか?俺だ」

「あつ、暁君?今開けるねー」

カチャツ、という音とともにロックが解除される。中の茉優先輩は、パソコンに向き合っていた。

「悪い、邪魔したか？」

「ううん！ちよつと気になることがあつてさ。アタシの趣味のレベルだから気にしないで」

茉優先輩はそういうと、俺の方に向き直った。

「それで、どうしたの？アタシの研究室まで来るなんて珍しいね？」

「これを渡したくてな」

俺は、数本の花がまとまった小さな花束を渡した。

「花束……？」

「今日はホワイトデーだから、お返しだ」

「あ、あーそういうえば……別に、良かったのに……」

そうは言いつつもニコニコとしている茉優先輩。喜んではくれているようだ。

「それにしても、わざわざ花束だなんて昔から変わらず不器用で、可愛いねえ」

「なっ!?昔の話は、無しと言っただろ……!」

「あはは、ごめんごめん」

「……俺はもう行くからな」

俺は、変わらずニコニコする某優先輩を背に研究室を後にした。

「ありがとね暁君♪でもこれ……花言葉とか、知ってるのかな？」

アタシの目の前にある綺麗な花達。自分で選んだのか、選んでもらったのか……

「感謝を伝える、かぁ……ふふ」

自然と微笑んでしまうのだった。

「壬生さん、よかった」

「在原先輩？よかったって、どうしたんですか？」

「いや、なんでもないんだ」

正直なところ、一番行動が読めず会えるか不安だった壬生さんと、廊下で偶然会えた

俺はそんなことを口にしていた。

「そうですか……ところで、何か用事ですか？……あつ、もしかして」

そこはさすがに察しがいい壬生さん。どうやら勘付いたらしい。

「たぶん予想通りだとは思うんだが、これ。ホワイトデーだからお返しだ」

「わーっ！ありがとうございます、先輩！お菓子、ですか？」

「ああ。悩んだんだが思いつかなくて……結局普通にお菓子になってしまった」

「こういうのは気持ちが大それたんですよ！それに、気持ちだけじゃなくちゃんと悩んでくれて、こうしてお返しも頂いてるわけですしね」

心からそう思ってくれているのだろう、そう伝わるような言い方だった。

ファッション雑貨を渡しても元々センスがない俺だ、壬生さんに嫌な顔をされてしまうかもしれない、と不安になりながら選んだ無難なお菓子だったが、その不安もかき消えていた。

……相変わらずすごいな壬生さんは……

「そう喜んでくれるとお返しをした甲斐があった。」

「にひひ。改めて、ありがとうございまーす！そうだ、先輩！七海ちゃんならさつきまで話してたので、部屋にいますよ？」

「……よくわかったな」

俺が後ろ手にもっている荷物を見て察したのか、七海がいる場所まで教えてもらった。

……ここまできると逆に恐ろしい。

「ありがとう。じゃあ俺は七海のところに行ってくる」

「はいー」

元氣ハツラツな壬生さんに教えてもらった通り、俺はそのまま七海の部屋に向かうこ

とにした。

「七海、入って大丈夫か？」

「暁君？大丈夫だよ」

七海の返答を待つて部屋へ入る。七海は携帯端末を操作していた。

「なにか仕事か？」

「ううん、ちよつとした情報収集。心配することはないよ」

自然と仕事の話になる俺たち。いかんいかん、今日はそういう話をしにきたんじゃない。い。

「七海。いつもありがとうな」

「……急に、何？気持ち悪いんだけど……」

これも違う。七海に思いっきり不審がられてしまった。

だが、感謝しているのに気持ち悪いは言い過ぎじゃないか？

「まあいい。これを渡しに来たんだ」

「何がまあいいのかわかんないけど……何これ、お菓子とーハンカチ？しかもわたしが好きなキャラ」

悪くはない選択だったと思うが……なぜか七海がこつちをジツと見る。

「お兄ちゃん……これ、お兄ちゃんが選んだんじゃないでしょ」  
「うっ、どうしてそう思う!？」

「このお菓子、好きだけどお兄ちゃんに言ったことない。こっちのキャラの話だつて」  
「……その通りだ」

実はこれ、親父から聞いて選んだものだ。今回真剣にお返しに悩んでどれだけ七海のことを知らないか思い知った。というか親父にも同じことを言われた。

「お兄ちゃんはそんなに気を使える人じゃないんだからいいのに……」  
「……すまん」

なんだかなにもかもお見通しにされて面目が立たなかった俺は思わず謝った。

「謝らなくていいよ。その、ありがとう。恥ずかしくてちよつと意地悪言ったけど、真剣に悩んだり、聞いたりしてくれてプレゼントしてくれたのは……嬉しいから」

少し照れながらそういう七海。普段からこれくらい素直だったらしいんだが……  
「なら良かった。これでとりあえず、安心だな」

「……? とりあえず安心、つてみんなにも渡したの?」

「ああ、一通りはな」

「ふーん……これから本番、つてことね」

「いや、そんな気はないんだが……」

ジーツとこつちを見る七海。この見通されてる視線は本当に苦手だ……

「まあ、これから行くのは事実だ」

「そつか。でもいいの？もうすぐお昼だよ？」

「っ！まずい、昼前にはいかないとだ」

「早く行つてあげなよ。あやせ先輩、怒つちやうよ？」

「悪いな七海。それじゃあ」

俺は七海にそう言い残すと、少しかけ気味に廊下を歩いて行つた。

「もう、ほんと慌ただしいんだから……」

お兄ちゃんからもらつたお返し。毎年ちゃんどくれるけど、ここまで悩んでたみたいなのは初めてかも。無難なお菓子とかも多かつたし……

「えへへ……ありがとう、お兄ちゃん」

「まずい遅くなつた……」

本当はもう少し余裕を持つて来るはずだった。だがこのくらいの時間ならまだこの後の予定に狂いはでないと思うが……

「あやせ、俺だ」



「はい。入っていいわよ」

ドアをノックし、あやせの返答で部屋に入る。

「お邪魔します」

「予定はもう終わったの？」

「ああ」

元々今日はデートをしようと俺があやせに言っていた。午前中は少し用事があるので遅れる、とも。

今日のスケジュールは全部俺が立てることになっている。

「まずは、これ。バレンタインのお返しだ」

「ネックレス?……ッ!」

「今日はこれをつけて付き合ってほしい」

俺が渡したのは、猫を形取ったチャームがついたネックレスだった。

「かわいい……ありがとう、暁」

嬉しそうにネックレスを見るあやせ。まず最初は成功だ。

「とりあえず、行こうか」

「ちよつと待って。これ……暁がつけて?」

「あ……そうだな、悪い」

部屋の外へ行くこうとした俺をあやせが引き止める。

(焦るな……焦るな……今日はまだまだ長いぞ俺)

自分が用意したサプライズを頭の中でもう一度思い出す。

(よし、大丈夫……)

自分にそう言い聞かせながら、あやせの後ろに周りネックレスをつける。

今度は、あやせと手を繋いで歩き出す。

シミュレーションはバッチリだ。隣にいる彼女の笑顔のためなら、頑張れる。

## 魔法少女ななみん

「慈愛の天使よ、その息吹をもって彼の者の傷を癒したまえ。ヒール！」

痛みが引いていく。俺は、仕事中に少し打ってしまった右手を七海の能力で治してもらっていた。

「ありがとうな、七海」

「ううん。私は大丈夫だけど、本当に気をつけてよ？」

いつものように七海に小言を言われてしまう。だが、今の俺にはそれよりも気になることがあった。

「なあ七海。前から気になってたんだが、そのながーい詠唱？呪文？つてなんなんだ？由来とかあるのか？」

俺は前々から気になっていたことを聞いた。一度聞いた時は確か『格好いいから』、と言っていたのは覚えてる。

「えっ？うーん……特にこれってという由来とかはないんだけど……色々見たり、聞いたりしてるのが混ざって、かな？」

「あー、例のオタク趣味か」

七海にはオタク趣味がある。前は時々イベントに行ったり、コスプレもしていたようだが、最近仕事で忙しいのか、そうしているのを見ていない。

「最近、イベントとか行かなくていいのか？」

「あくまで、趣味だからね。お仕事が入っちゃったり、その心配があつたりすると中々……」

俺はそれを聞いて、不意に思いついた。

(七海に休暇をやろう)

いつもなんだかんだ世話になってるし、兄妹とはいえバディなのだ。そのぐらいの気遣いをたまにはしてやってもいいだろう。

「直近で実は行きたいイベントとかあるのか？」

「イベント？うーん……」

俺が調べてもいいが、一番確実なのは直接聞くことだろう。

俺は、早速行動を開始した。

「それじゃあ、行ってくる」

「ああ、気をつけてな。在原君、七海君」

「ありがとうございます、二条院先輩」

俺と七海は、キャリアバッグを持って寮を出ようとしていた。外出許可証はすでに提出済み。朝早く出ることにしたが、二条院さんは律儀に送り出すために起きてくれた。いた。

ちなみに、許可証に書いたのは日帰り旅行ということになっている。七海いわく、そういう趣味は時と場所を選ばらしい。

(まあ確かに馬鹿正直にイベント行ってきますとは書かないか)

「今日はありがとう、暁君。わざわざ休みだなんて」

「いや、なんてことはない。いつもお世話になっているんだし、そのお礼も兼ねてだ」  
「……………」

俺がそういうと、七海は驚いたような顔でこつちを見たまま固まってしまった。

「どうした？何か変なこと言ったか？」

「うん。暁君がいつもお世話になってる、だなんて……珍しいからびっくりしちゃった」  
「俺をなんだと思ってる!？」

「キモいシスコン?」

前々から感じてはいたが、七海が辛辣だ。

(どこかのタイミングで少しくらいは挽回しなくては……)

「シスコンといえば、わざわざついてこなくてよかったのに……暁君、そういう趣味はな

いでしょ?」

「ああ……そういう趣味というか、趣味自体がなくて困ってる。俺も最初は七海一人だけでいいかと思っただが……親父がな」

話は数週間前に戻る。

「というわけだ。なんとかならないか? 親父」

「その頃なら多分大丈夫だと思っただが……」

「俺はいつもの定期連絡ついでに、親父に七海へ休暇をくれないかという話をしていった。

「ちなみにだが、その休みはどこへ出かけるか聞いてたりするか?」

「ああ。確かイベントの名前が……」

俺は七海から聞いたイベントの名前を親父に伝えた。電話口の向こうから少し間を空けて返答が返ってくる。

「……タイミングが良いというか悪いというか……」

「……? 何か問題なのか」

「俺たちとしては都合が良い。だが暁が言う通り単純な休みという話であれば都合が悪い」

「だから、何か問題なのか」

妙にもつたいつけて言う親父。俺は親父を早く言うように急かした。

「実は、そのイベントの件で少し調査したいことがあつてだな……」

「……なるほど」

そこまで言われて俺も勘付いた。

つまり、イベントついでに実地でしてほしい仕事があるのだろう。

これは確かに休暇という名目で、かつ少し仕事もしてもらえて親父目線では都合が良  
いだろう。

だが、これでは完全な休暇にはならない。仕事内容によっては一日中仕事のことを頭  
の片隅に入れておかなければならない。この点でいえば都合が悪いだろう。

正直、単純な休暇を取ってもらいたい俺としてはそれは避けたかった。

「なんとかならないのか?」

「そこまで行くからにはこの仕事はしてもらいたいんだが……いやまあ後に回しても良  
いレベルではあるが、また別の奴を派遣するのもなあ……」

親父は、しばらくうーんうーんと唸っていたが、やがて閃いたように突然口を開いた。

「そうだ、暁! お前も一緒に行つてこい」

「……はあ!」

ーと、いうわけで。親父の一存で俺も付いて行くことになったわけだ。

親父が言いたいのは、俺が付いて行って七海に仕事が回らないようにやってしまえということだろう。

俺なら兄妹のついででついて行ったということでも仕事を意識しなくて済むし、七海を近くから見守ることもできるからだろう。

(……というか、親父が心配だから俺にちゃんと見とけつてというのがほとんどの理由だろうな……)

「暁君？」

「うん？ ああ、悪い。ぼーっとしてた」

「もう……お父さんも心配しすぎなんだよ。私だってもう一人で大丈夫なのに。とかお兄ちゃんじゃ逆に頼りないし」

「おい」

そうは言いつつも、七海は柔らかい笑顔だった。なんだかんだで心配してもらえているのは嬉しいのだろう。

そう思ってくれているのは都合が良い。名目上は俺は暇つぶしと親父が心配なので付いていけと言われた、ということにしてある。



まさか仕事のため俺が付いてきたとは思ってないだろう。

……いや、親父に言わせれば仕事がついでで七海を心配する方がほとんどなので、七海のは勘違いでもなんでもないとと言える。

そんな会話をしたり、俺は仕事の確認をしながら、俺たちは会場へと向かった。

「それじゃあ、私はこっちだから。コスプレは見にこないでよね!」

「わざわざ楽しんできるところに水を差しには行かないよ」

会場について七海と別れる。七海には釘を刺されたが、俺はここからは仕事だ。親父も心配とはいえないイベント中ずっとくっついていると言うつもりもないらしい。

(さてと、あそこならいいか。それにしても人が多いな……)

俺は親父と連絡を取るため、雑踏を掻き分け人気が少ない方へと足を運んだ。

「よし。これで8個目か」

「ご苦労。あと少しで終わりだな」

俺は、持参したキャリアケースを持って会場内を練り歩いていた。

仕事の内容は、会場内の各所にある小型のアストラル探知機の回収および再設置。聞いた話だところの仕事は前から定期的に行っているらしい。

かなり大きな会場で、かなり大々的なイベントだ。アストラル能力関連の事件が起きないよう対策をしているのだろう。

「結構歩くな……」

「ただでさえ会場が広いからな。機械の性能を上げたいものだが、予算がな……」

この仕事は七海にやらせなくてよかった。改めてそう思った。こんなことをしていたらイベントを楽しむどころではなかっただろう。

「さて、次はどこだ？」

「あー次なんだが……」

「……何か問題か？」

テキパキと指示を飛ばしていた親父の声が言い淀んで止まる。

俺は、疑問を感じて聞き返した。

「ちなみになんだが、七海ちゃんはやっぱり、コスプレしてるんだよな？」

「たぶん、そうだと思うが……」

「だよなあ……」

詳しく聞いたわけではないが、なにか服っぽいものを作っていたようだったし、更衣室の方に歩いて行ったのだ。それはほぼ間違いないだろう。

「いやな？ 次の場所がそのコスプレエリアでな。見つかってしまうとアレだろう？」

「……確かに」

単純に見つかるだけならまだ見に来るなど怒られるだけかもしれないが、仕事だとバレルとまずい。

「慎重な行動が大事だ。心して任務にかかれ」

「了解」

心なしかノリが軽いのは、身内が多く危険が薄い仕事だからだろう。  
気の緩みを自覚しながらも、俺は指定された場所へと向かった。

「たぶん……アレかな」

「七海ちゃんはいたかー!」

俺は七海と思しき人物をコスプレエリアで見つけた。俺に自信がないのは、七海の格好がヒラヒラとしたものが大量についていて、いかにも女の子らしい……いわゆる魔法少女風の服だったからだ。

「七海ちゃんはどんな服装なんだ!」

親父がうるさい。俺は七海にバレないようにそちらを見ながら、ある程度の詳細を親父に伝えた。

露出は少ない。いかにも女の子らしいヒラヒラがたくさんついでいるぞ、と。

親父は露出が少ないの一言でだいぶ落ち着いたようだった。

「それじゃあ任務に取り掛かる」

「そうだな……ずっと見守っていてあげたいが、バレたら元も子もない」

俺は、早速仕事に取り掛かることにした。だが、問題はすぐに見つかった。

(近い……)

そう、探知機の設置場所が七海にいる位置から案外近いのだ。すぐに見つかる距離では無いが、意識して探せば俺だとバレてしまうだろう。

「どうしたものかな……」

「……！親父」

困り果て黙り込む親父に、俺はすかさず声をかける。

「七海がタブレット端末をいじってる」

「それはいい知らせだ！その隙に回収と設置をしまえ」

「了解！」

七海が下を向いて端末を操作している間に、俺は一連の仕事を終えてしまうことになった。

回収および設置は簡単だ。小型で円形の装置を左に回転させロックを外し、回収。同じ要領で今度は新しい装置を右回転でロックし、表面のボタンを押せば装置が動き出

す。

問題といえ、ボタンは二種類あるので押し間違えないようにしなければいけないということだがー

「あ」

「どうした暁」

俺の思考は固まる。ボタンは二種類ある。一つは、周囲のアストラル能力者を探知し、電気信号で反応を送り返すもの。もう一つは同じく探知するのだが、周囲に能力者がいた場合、大音量で警報音が鳴る。

俺も、立派なアストラル能力者だ。

（誰だこんな機能つけたやつ！）

とつさに能力を発動、離れようとするが、間に合うはずもない。

（ああ……おわった）

警報音が鳴れば当然注目される。七海にバレるのも問題だが、そんな装置をつけていることがバレるのもまずい。あくまで特班の任務。秘密裏なものなのだ。

俺は諦め、足を止める。そろそろ警報音が鳴り響くはずだー

（……う？鳴らない）

「暁。すぐに脱出だ」

「……りよ、了解」

間違えたボタンを押したことは既に親父のところにも伝わっているだろう。だが親父はすぐに次の指示を出す。

「すまん」

「いや……確かにミスは良くない。まあ今回は……フォローが完璧だったな」

歯切れが悪い。何か言いづらいことでもあるのだろうか。

「何はともあれ設置は終わりだ。そこをすぐに離脱しろ暁」

「了解」

七海の方を見るが、まだ端末をいじっているようだ。俺は疑問を抱きながらもその場を離れた。

「おつかれ、七海。楽しかったか？」

「うん。ありがとう暁君」

イベントが終わり、七海と合流する。七海は、満足げな顔をしていた。休暇をとった甲斐があったというものだ。

仕事に大きなミスはあったが。

「暁君も、お疲れ様」

「お、おう……?」

七海にお疲れ様と言われるのは何か変だ。俺は暇つぶしについてきたということになってはいるはずだが……

「仕事はちゃんと落ち着いてやらなきゃダメだよ、お兄ちゃん?」

「そうだな……ん?あー……: どういう、ことだ?」

何かおかしい。俺はそれに気づくが、混乱する頭では整理がなかなかつかない。

「警報音が鳴りそうだったから、ハッキングして無理やり止めて、ボタンの切り替えもしいたからね。まったく、ドジな相棒がいると大変だよね」

「……」

俺はもはや黙りこくってしまふ。

つまり、あの時助けてくれたのは七海で、いじっていた端末はそのチェックでー

「機械関係の任務は、暁君は苦手なんだから私に任せないと」

「……すまん、七海」

結局、俺はまた七海に助けってもらって、七海は仕事のことを少しでも気にしていたこととなる。

そう理解した俺は七海に謝る。

「謝らなくていいよ。本当にありがとうね、お兄ちゃん。お兄ちゃんがそうやってしよ

うとしてくれたことが嬉しいんだよ？」

七海から素直に、茶化さない感謝の言葉を向けられる。

「今度はちゃんと休みをー」

「大丈夫だよ、別に。確かにイベントも楽しかったけど、私はお父さんやお兄ちゃんが作ってくれた学園でのみんななどの生活が、一番楽しいから」

七海にそう言われ、俺は言葉を飲む。

「……そっか」

七海がそう感じてくれていて、本当に良かった。

七海のための休みだったはずだが、俺の心は妙な満足感で満たされていた。



## 恋人の語らい（仮屋和奏）

「ねえ、ブレイブマン」

「……和奏。オレたち、もうダメみたいだ」

「ちよ、ちよつとごめん、冗談だつてば」

チャイムが鳴り、放課後になった瞬間かけられた言葉に、そんなリアクションを返す。「どうかしたのか？」

まさかからかうためだけに話しかけてきたわけじゃ無いだろう。

「あ、えつと。一緒にご飯でもどうかなくて」

今日は親父も会社に泊まりだと言っていたし、特に用事も無い。オレは二つ返事で答えた。

「よかった。実は気になってるお店があつてさーあ、海道！海道も一緒にご飯行かない？」

「ご飯？」

「そうそう。最近できたらしいんだけど気になって、みんなでどうかなくて」  
通りかかった海道に声をかける和奏。

……正直、二人きりで、と思わなかったかと聞かれると嘘になる。

「あー……悪い。今日はちよつと予定があつて……というか、終史は二人きりの方が嬉しそっただけど？ 和奏ちゃん」

「えっ!？」

ニヤニヤしてオレの方を見ながら言う海道と、こつちを向きながら驚いた声を上げる和奏。

（海道……）

「それじゃあ、俺はもう行くから。楽しんでな、お二人さん！」

なんとも言えずに固まっていたオレと少し赤い顔の和奏を置いて教室から出て行く海道。残ったのはなんとも言えない空気だった。

「そ、それじゃああんまり遅くなってもあれだし、行こっか」

「そ、そっただな」

オレたち二人は、ドギマギしながら教室を出た。

「ねえ、さっきのことなんだけど……」

和奏が気になっていると言う店に向かう道中。沈黙気味の空気を破るように和奏が話し始めた。

「終史はさ……私と二人きりがよかったの？」

……どう答えたものか。

和奏から伝わってくるのは甘酸っぱいとも言いきれないなんとも微妙な感情。

(こんなことで嘘言ってもしょうがないか……)

そう思ったオレは、恥ずかしさは抑えつつ正直に言うことにした。

「……うん」

「そっか。……実はさ、私も……あ、ついた。ここだ」

オレにとってはこちらのほうが悪いタイミングで、和奏が気になっていた店に着いたらしい。

「それじゃあはいろっか」

明らかな照れ隠しで店に入っていく和奏。オレは若干の不満を感じながらも続いて店へ入った。

和奏の言っていた店は、商店街の一角にできた洋食屋だった。お洒落な店内で、洋食なら一通りが揃っているようだ。

席に座り、注文を済ませる。

「お洒落だけど落ち着いてる感じもあっていいな」

「うん。ご飯も美味しそうだし、期待できるかも」

そんな取り止めのない会話を少ししていたが、やがて二人ともさきほどの会話に気を取られて口数が減ってくる。

「ねえ柘史、結婚するならどんな人がいい？」

気まづくなるのを避けたいのだろう、和奏は少し強い勢いでそんな話題を切り出してきた。

後から思えば気を抜いていたのだろう。オレはその質問に対してシンプルな答えを返した。

「和奏がいいかな」

「くくくッ!? 柘史!? 今のはそう言う意味じゃなくて……!」

「えっ、あつ、すまん!」

二人してワタワタとしているタイミングで料理が運ばれてくる。

「とっ、とりあえず! 食べちゃおう?」

「お、おう」

当たり前だが、こんな状況では味がわかるはずもなかった。

店を出て、帰路につく。

「はあ……調子狂うなあ……」

「なんか……悪い」

少し歩いて商店街を抜けたところで和奏がそういった。

能力でわかるのは、とりあえず怒ってはいないということだけだ。

「いいよ。柘史は悪くないし……というか！ もうこれ以上はモヤモヤしちゃって無理

！」

和奏は少し大きな声でそういうい、オレの方に体ごと向き直った。

「さっきの話だけど、私も柘史と二人で来られて嬉しかった！ 海道がいて恥ずかし  
いって言うか勢いで誘っちゃったけど、最初から柘史と二人きりで来たかった！」

吹っ切れたようにそういう和奏。

「あ、ありがとう……な？」

「それと、味がよくわかんなかったからまたこようね」

「それって……二人でか？」

「うん、二人で」

言いたいことは終わったとばかりに和奏はオレの隣に来ると、手を繋ぐ。

「柘史はさ、時々大胆なこと言うよね」

「そうか？ 自覚はしてないんだが……」

和奏は、そう言って変わらず歩き始める。相変わらずいい意味で男らしいと言うか豪快というか……よっぽど和奏のほうが大胆だ。

だが、そんなところも良いところだ。

オレが自分の気持ちを再確認しているうちに、いつも別れる場所までついていた。

「それじゃあ、また明日」

「おう、また」

さっぱりとした挨拶だが、寂しくはない。オレたちは、こんな幸せな日常が続くことを知っているから。

# あやせとラーメンを食べに行くお話

枕元のスマートフォンが震える。

俺は夕食を軽く取り風呂に入り定期連絡も終え、自室でゆつくりと休んでいた。

(誰からだ……？ 七海か？)

ゆつくりと落ち着いた動作で画面を見る。メールが来ていることを示すバイブだったようだ。

(未だに細かい使い方はわからないな……)

七海に教わろうと思いつつも中々機会がなく使いこなせていないスマホだが、その中でも少ない使えるアプリであるメールを開く。

(……あやせからだ)

少し心が弾む。相変わらず自分のことながら単純だな。

「……………なんだそれ」

メール読み進め俺はそう呟くと、窓を開け、あやせの部屋の方へ向かうことにした。壁を伝って一気にあやせの部屋まで登る。

(あんまり寒くないな。もうそんな時期か……)

そんなことを考えながら、あやせの部屋の窓をコンコンと叩く。待つてましたとばかりに窓はすぐに開かれた。

「どうしたんだ急に」

「だってテレビで見ちゃって……取材も遅くなりそうだからって夕食も早めに少ししか食べてないし……」

あやせから受け取ったメールは、端的に言えば『今からラーメンを食べに行きたいので部屋まで来て』だった。

「それにしたって今日じゃなくなつて……」

「いやや今日！ この夜中に行くのが良いのよ！ なんていうかこう食べちゃいけない時間に食べる背徳感というか……」

「……いやそもそも門限を過ぎてるんだが」

どうやら変なスイッチが入ってしまったているようだ。テレビのせいだろうか。それとも何か動画でも見たのか。

「それでもどうしても今食べたいの！ ……………だめ？」

「うぐつ……」

あやせがしょんぼりとして言ってくる。確かに俺の能力を使えば不可能ではないはずだが……やめた方がいいのは確かだ。



「たまには恋人としてそういうワクワクすることもしてみたかったんだけどな……」  
「ぐっ!？」

正直俺でもわかった。明らかに猫を被っている。俺が断れないと思ってやっているのだろうか。

(流石にリスクを考えたら……ルートをしつかりすればできないことも……いや、でも

……断れ、在原暁……)

「ねえ……ささとる?」

「……わかった」

「やった!」

途端にニコツとするあやせ。

(言ってしまった……)

だがその笑顔を見てまあ良いかと思っただのも事実だった。

「……じゃあ、行くからな?」

「うん」

少しワクワクとして返事をするあやせ。本当にどうしたのだろうか。

(一連の事件が解決して、琴里さんの件も解決したから安心してのこう、なの……か?)

俺は楽しそうな彼女を両手で抱え、能力を解放。トンっ、トンっと寮を壁伝いに降りていく。

地上に降りると、素早く建物の影へと行く。監視カメラの位置は何度も通ったのでわかっている。とはいえ警備員を合わせたら回避が難しいポイントもあるのだが……

(……? 警備が、手薄?)

いつもより、警備員を見かけない。というかほとんどいない。しかも点検中で幕がかかっている監視カメラさえある。

俺は頭に疑問を抱えながら、門を飛び越え学院の敷地の外へ出る。

「……ふう。とりあえず、これで外だな」

「ありがとう、暁」

あやせを地面に降ろす。

「実はね? 今日だけはってお父さんに言ってるの」

「っ!」

あやせが言った言葉は俺にとっては衝撃的な言葉だった。

「つまり……俺たちが外に出てることはもうバレてるのか!」

「そういうこと。ダメ元で言ってみたら『今まで散々頑張ってきたんだ、今日くらいはい

いだろう』って」

「そうなのか……」

だからあやせもあそこまで今日は強情だったのか……理事長のほうも理事長なりの恩返しなのだろうか。

（いやでも警備が手薄ってそれはそれでー）

「ほら暁。それは一旦いいから行かないと遅くなりすぎちゃう」

「あ、ああ……」

なんだか今日は振り回される日だ。そう思いながら俺はあやせと一緒に夜の鷺巣研 究都市へと繰り出した。

「ここだ！」

あやせが指を指したのは、いたって普通に見えるラーメン屋だった。

「じゃあ、入るか」

「うん」

しっかりと事前に調べていたのか、あやせはスマホを弄りながら俺を案内してくれた。正直街の歩き方を知らない俺としては助かった。

「いらっしやいませ！ 2名様ですか？」

「はい」

「かしこまりました。2名様ご案内です！ こちらの席どうぞー」

店員に促されるまま二人用の小さなテーブル席に腰をかける。並んでいるわけではないが少し広めの店内はそれなりに席が埋まっている。中々人気のお店のようだ。

「どれにしよつかない……」

あやせはメニューを開いて食べるものを選んでいく。なんだか楽しそうだ。それだけでも連れてきた甲斐はあったと言えるだろう。

「……暁？ 選ばないの？」

「ああ、うん。あんまりこういうところになれなくてな……」

咄嗟に言ったが、これも事実だった。学院に来る前は七海にほとんど作ってもらっていたし、きてからは専ら寮の学食だ。

「私もそんなに慣れてるわけじゃないんだけど……はい、メニュー」

「すまん。えつと……メンカタカラメヤサイダブルニンニクアブラマシマシ、だったか？」

「ちよつと待つて。それどこで聞いたの」

「え？ 仕事先だが……」

「それは違うお店だから。というかそのお店に行ってもそれは言っちゃダメだから。」

「……？　そうなのか？」

昔ラーメン好きという人から聞いたラーメン屋での暗号、らしいのだが……あやせには止められてしまった。

結局、あやせに言われて基本的、らしいラーメンを食べた。人がたくさんいるだけあつて、味はとても美味しかった。

「暁、また来ようね」

「おう」

帰り道で、俺の隣で手を繋いで歩いていたあやせがポツリとそう言った。

「これから、もっともつと二人の思い出も作ろうね」

「もちろんだ」

そこまで言われて、やっと気づいた。今までは俺の仕事の件や、あやせの学生会長としてお姉さんのために頑張らないと、という思いが常に心の中にあつたのだろう。

全てひと段落したからこそその、あやせなりの思い出作りだったのだ。

「……あやせ、これからも一緒にいような」

言っただけで後悔する。流石にセリフらしかったか。隣の彼女の方を見る。

彼女は、こっちに振り向いて俺の顔をジッと見ていた。

「はあ……もう。そんなの、当たり前でしょ」

## 変わらない日常を（二条院羽月）

「よし。これでいい」

いつも通りの時間に起きて、いつも通り準備を済ませる。

自分の部屋から出たワタシは、そのまま中庭の方へと向かった。

「おはよう、在原君」

「ああ、二条院さん。おはよう」

ワタシが軽くランニングをしていると、道の先に在原君がいた。

（うんうん。毎日欠かさずランニングとストレッチをしているな……殊勝な心がけだ）

「……なんか一人で頷いてるが、どうかしたのか？」

「ああいや、なんでもないんだ。すまない。それじゃあ行こうか」

ワタシと在原君は、院内を一緒にランニングし始めた。

「はあ、はあっ……ふう。今日はこれぐらいにしようか」

「ああ。それにしても二条院さん、随分体力がついたな。今日は俺のペースで走ったが、

前より全然息が切れてないじゃないか」

「そういえば……前より少しは楽になったかも？」

ワタシは、実感できる自分の成長に少し喜びを覚えた。

「これも、毎日在原君が付き合ってくれたおかげだな」

「いや、俺は何もしてないよ。二条院さんの努力の成果だ」

「ははは。相変わらず返答に余裕があるな。前に言っていた家族のお陰か？」

ワタシと在原君は、寮に戻りながらそんな会話をしていた。

「七海君とは、その後喧嘩してないか？」

「ああ、この間はすまなかった……まさかあそこで地雷を踏むとは……」

「ふふ。在原君の七海君への愛ゆえだな！」

「やめてくれ！ そんなこと言ったらまたキモいとか言われるんだ！」

ロビーでそんな話をしていると、七海君と千咲君が上から降りてくるのが見えた。

「先輩方！ おはようございませー！」

「おはようございませう、二条院先輩、暁君。今日もランニングですか？」

「おはよう、千咲君に七海君。ちょうど今ランニングを終えて今戻ってきたところだ」

朝から元気な千咲君と七海君。ワタシは、さっきの話もあってか少し在原君をからかってみたくなっていた。



「ちやうど七海君の話をしていたんだ」

「へっ？ わたしの……話ですか？」

「ちよ、二条院さんそれはー」

「七海君への愛がいつぱいだったな！」

ワタシがそういうと七海君の動きが止まり、顔がすぐに赤くなっていく。

「~~~~っ！ 暁君!? なんでそういうこと言うの！」

「違う違うそういうことじゃなくて……！」

「にひひ。本当に七海ちゃん大好きですね、先輩！」

「ちよっ、壬生さんまでー」

「さーとーるーくん!？」

「七海、待て！」

「あはははは！ それじゃあワタシは、部屋に戻って着替えてくるぞ」

「二条院さん!？ この状態で俺を置いてかないでくれ！」

在原君からの助けの声を背に受け、ワタシは自分の部屋の方へと歩いていく。

「ふふ。本当に、賑やかだな」

ワタシも最近少し変わったかもしれない。前までならこんな意地悪はしなかっただろう。

後ろからはまだ三人の戯れあっている声が聞こえてくる。  
（さて、今日も一日楽しんで過ぐそう！）

## 気丈な彼女（矢来美羽）

ある日の放課後。授業の終わりを知らせるチャイムが鳴る。

「ねえ、佑斗？」

「すまん美羽、行かないと……」

俺は近づいてきた美羽に軽く頭を下げ謝ると、教室の外へ向かった。

俺は急な風紀班からの連絡で、支部へと向かうことになっていた。しかも男だけ、と言う連絡内容だったので布良さんと美羽は一緒になく、休みになっていた。

（ごめん美羽。埋め合わせはするから……つと）

美羽へのケアを忘れないよう、歩きながらメールを送る。この手のことで嫉妬させてしまったことは何度もあるので、今回は気をつけよう。

俺は携帯を閉じると、支部へと向かった。

「……ねえねえ、美羽ちゃん大丈夫かな」

「いや……佑斗君のあの反応はまずかったね。せつかく話しかけようとしてたのに振り切って行っちゃうんだから……」

私たちが話していると、美羽ちゃんがこちらへ振り返る。

「さて、布良さん？　一緒に帰りましょう？　ニコラはカジノだったわよね？」

「あつ、ああ、うん！　それじゃあボクはそろそろいくね……」

（あれ、美羽ちゃん怒ってない……？）

至って普通な美羽ちゃんと一緒に、私は寮へと帰った。

「意外とかかるもんだな……」

俺は、風紀班の支部から解放されて帰路へとついていた。既に空がうすら明るくなり始めている。

（まさか……までかかるとは……）

急な呼び出しは連絡ミスで俺にだけメールがきていなかったのが原因だった。今日は健康診断と、その空いた時間に書類の整理をしてほしいとのことだった。

男の俺だけ呼ばれたのは、健康診断の日程が男女で違うからだっただけらしい。それと空いた時間の書類整理ならそんなにかからないと思っただけだが……風紀班の一人のミスから始まった。

仕事も終わりになる頃、必要なはずの書類が足りないことに誰かが気がついた。どこかに紛れてしまったらしい。結局整理したものをまたひっくり返すように探してまた

戻して……

(美羽、大丈夫かな……早く終われば直接謝つとこうと思つてたが……)

こんな時間では流石に起きていないだろう。俺は、少し気疲れしたまま寮の玄関を開けた。

「ただいま……」

「佑斗。おかえり」

「美羽？」

リビングには、美羽が座っていた。

「不思議そうな顔をしているけれど、恋人の帰りを待つのは自然でしょう？ お疲れ様」

「ああ、ありがとう……」

確かに美羽が言ったことはそれほどおかしいことではない。それよりも、美羽が怒っていないことに気が向いてしまっているのだが……

「あの、美羽？」

「私は、もう寝るから」

部屋へと向かおうとする美羽の手を掴む。

「なに？」

「ちよつと、話がしたいからさ。……いいか？」

「……………わかった」

俺が引き止めると、美羽はソファへと腰をかけた。俺もその隣へと腰をかける。

「……………」

体感的には数分。実際は数十秒だろうが、沈黙が流れる。

「ねえ？」

沈黙を破って話しかけてきた美羽。

俺は意を決して、すぐ近くにある美羽の手の上に自分の手を乗せる。

「っ、佑——」

驚いたような顔でこっちを向いて、何か言おうとした美羽の言葉は、途中で遮られた。

「んっ……………急に、キスはするいわよ……………」

「すまん。卑怯だとはわかってるんだが……………美羽、好きだ」

俺は、唇を話すと同時に愛の言葉を囁く。美羽の顔が少し朱に染まるのが見えた。

「もう……………ばか……………」

そういつて美羽は俺の胸へと顔を埋める。俺のせいで寂しかったのだろう。それを正直に言えない性格なので、無理に平気なふりをしていただけののだろうか。

「今日は、ごめん」

「……………許さないわよ。私は、Mなの。もっとギュッって抱きしめて？ それで……………離さ

ないで」

俺は、美羽に言われた通りその身体を抱きしめる。

「もっと強く」

「わかった」

強く、痛いくらいに美羽の身体を抱きしめる。

「佑斗……あつたかい。それに、良い匂い。大好きな人の匂い」

満足そうに顔を綻ばせる美羽。

「……今日は風紀班でな——」

「言い訳はいいから。もっと近くに来て」

俺の声は遮られ、さらに要求が増える。俺はさらに美羽と密着し、美羽を膝の上に乗せるような体制になる。

「私、幸せよ？」

「……俺もだ」

美羽と付き合ってから何度も抱いたその感情を、俺は繰り返し、強く感じていた。

## 検索履歴（茉優・あやせ）

すっかり寮のみんなが寝静まった頃。俺は七海の部屋にいた。

「七海。本当にやるのか？ 気がひけるんだが……」

「仕方ないでしょ。お仕事なんだから」

七海がトン、トンと端末をいじる。機械系に疎い俺は、その隣で座ったまま様子を見ていた。やがて何か打ち終わったのか、七海から端末を渡される。

「はい、これ。暁君は式部先輩とあやせ先輩だったよね。私は、二条院先輩と千咲ちゃん」

「ああ」

「まずは式部先輩の端末の方に入っておいだから」

そう言ってもう一つあった端末に目を向ける七海。今回の仕事は、普段仲の良い友人達の携帯端末を覗くという、どうにも罪悪感が拭えない仕事だった。

親父によれば、上からの指示で今一度特班周りの洗い出しをしたいらしい。

『この間上が起こした情報漏洩のトラブルのせいだと思ってる……こつちにまで飛び火してくるとは。気がひけるとは思いますが、逆に友人達の端末がウイルスにかかってな



いか調べてあげるとでも思ってた取りかかってくれ』

ーとのことだ。

(仕方ない。やるか……)

これ以上ぼうつとしていてもまた七海に怒られるだけだ。俺は仕事に取り掛かるべく、端末と向き合った。

最初は『女の子のデリケートなところ覗くなんて暁君はダメだよ』とかなんとか言っていた七海だが、流石に仕事量が多すぎる。

入っているアプリにメール、検索履歴なんてもので見るのだ。

(メールに通話履歴くらいならわかるが……検索履歴はいるか?)

ちなみにこれでも人の割り振りには気を使った。三司さんは例の秘密の件で七海にバレるわけにはいかなないので当然俺。式部先輩も過去の件であまり俺の素性が悪かった時代を七海に知られたくなかったからだ。

七海には『暁君。その二人のが、見たいんだ?』なんて誤解を生みかねない言われ方をされてしまったが大仰に否定もできない。

「と、これだよな? 七海」

「うん、そう。そっちは触っちゃダメ。そこね」

わからない操作はすぐに七海に聞いて中を確認する。

式部先輩の方から覗いてみたが……

（まあ、予想通りかな）

検索結果は大体がアストラル能力についての研究論文。電話やメールも研究者宛のものが多かった。

だが、中には気になるものもいくつかあった。

（「男の子 癒す方法」、「かわいい 男の子」、「男の子が優しくする 意味」か……俺のこと、だよな……？）

茉優先輩が気にかけてくれているのは嬉しいが、恥ずかしいような何とも言えない気持ちだった。

（……ッ!? 「暁君 かわいい」!? それは検索してもでないだろ! というか違うだろ!）

俺は叫びたくなる気持ちを必死に抑えて心の中で突っ込んでいた。

「……暁君？」

七海からジトーツとした目線が送られてくる。まずい。

「いや、なんでもない。なんでもない。茉優先輩の方は確認した。大丈夫だ」

茉優先輩のいないところまでしてやられた気はするが、俺は端末を一度閉じ、七海の方へ渡した。

「本当かなあ……いや、お仕事で疑ったりはしないけど……変なこと、してないよね？」

「してない。というか俺にはできない」

「……それもそっか」

助かった。俺が機械系に疎いところが良い方に出たようだ。

「はい。こっちがあやせ先輩ね」

「おう」

少ししてまた七海から端末が渡される。とりあえず早くこれを終わらせて休もう……

そう思いつつ俺はテキパキと中を見ていく。アプリ、メール、電話、特に問題ない。

「みんなの三司あやせ」だ。

一番問題があつたのは、検索履歴だった。

(何というかこれは……ある意味予想通りか……)

三司さんの検索履歴は大体三つに分かれていた。アストラル能力についてと、猫。それ……胸。

比率にしてみれば猫、アストラル、胸、猫、胸、アストラル、胸、胸、胸、胸……

(……よっぽど、気にしてるんだな)

さつきより罪悪感が強い。知っていたとは言え見てはいけないものを見てしまったような……

（スマン。このことは絶対に言わない）

本人が聞いたらこの謝っているのすら怒られそうだが、俺はそう思わずにはいられなかった。

「……暁君？」

「はっ!？」

「またもや七海に怪訝な顔でジッと見られていた。

「さつきから変だよ。何かあったの？」

「い、いや？ 問題ない。三司さんの方も問題ない」

「……嘘ついてるでしょ」

「ぐっ……」

「流石に鋭い。だが、三司さんの胸の秘密をここで明かすわけには……!」

「七海、本当に違う。俺はやってはいけないことをしてるんじゃないかっていう罪悪感が酷くてな？ 絶対に悪用はさせないっていう覚悟がだな……」

「……はいはい。わかった」

「そう言って七海は俺の手から端末を取る。幸いにして検索履歴は既に閉じてあった。」

「じゃあお疲れ様。連絡は私からしておくから」

「おう……」

守りきった。俺の胸は達成感であふれていた。

「とういうわけで、俺は言わなかったぞ。三司さん」

「……どういふ訳か知らないけど、いきなり学生会室に来たと思つたら急に何？」

「それじゃあ、俺はもう行くから」

「は？ ……え？ ちよつと。ほんとに行くの在原君？ ほんとにそれだけ言うために来たの!? ちよつと、在原君!」

叫んでいる三司さんを後ろにして、俺は学生会室から出る。スッキリした気分だ。

俺が晴れやかな気持ちで廊下を歩いていると、前から茉優先輩が歩いてきた。

「あ、暁君！」

「ああ、茉優、先輩……」

あれを見てしまったあとだ、なんだか関わりづらかった。

「? どうしたの? なんかぎこちないけど……」

「い、いやなんでもない。俺はもう行くから……」

「えっ? 暁君!? アタシ何かしちやつたかなあ!」

俺は茉優先輩から逃げるように廊下を走っていた。

ーしばらくの間、茉優先輩とも三司さんとも不自然な感じになってしまったことは想像に難くない。

# パッドを落としました（あやせ）

「……うそでしょ」

焦る。いつ、どこで？　そもそもなぜ気づかなかったのか。疲れていたのは確かだが……

（これはまずい。まずいまずいまずい非常に、まずい……このままだとここから出られない……）

私は放課後の学生会室の中で一人、焦りに焦っていた。というのも、パッドがない。1組はある。これは背中の方までつけるタイプだから落ちようがない。だが、もう1組がない。

（落としたとしたら、更衣室……？　いや、それしかないでしょ……朝からつけてなかったなんてことはないだろうし……）

何度も何度も頭の中で今日一日の自分の行動を繰り返す。一日問題はなかった。とするとさっきのプールでの授業で間違いないだろう。

（……一つだけ、あてはある……けども……）

そう、この学院でただ一人だけの私の秘密を知っている人。その人に頼んで探して貰

えばいい。

（でもそれは……なんか、負けた気がするというか、それをしてしまったら女としておしまいというか……）

私自身の変なプライドが邪魔をしていた。こうなつては、自力でなんとか更衣室までたどり着くしかない。私がそう決意をした時。

「あのー、あやせ先輩居ますか？」

「ツツ!!」

扉のノック音と共に声が聞こえてくる。油断していたこともあつて、声にならない悲鳴をあげてしまった。

「ち、千咲さん！ どうかしましたか!？」

「あやせ先輩！ 学生会室にいたんですね」

声と共にガチャツツと音を鳴らしてドアノブが回る。

「ま、まま待つてください！ ストップ！ 開けちゃダメです!」

「えっ？ ご、ごめんなさい……」

咄嗟に叫んだが、どうにか扉は開けられずに済んだようだ。

「ちよつと中でミスするとまずい書類を書いてまして……ごめんなさい」

「あつ、いえいえ。急に開けようとした私が悪いですから……あやせ先輩、少しだけ話し



かけるのは大丈夫ですか？」

「はい、もちろんです」

（気を遣わせてしまつてごめんなさい……千咲さん）

「七海ちゃんが寮のほうでお菓子を作るらしくつて、もしよかつたらあやせ先輩も一緒にどうかなあと思ひまして」

「あ、あ……」

そうしたい気持ちは山々だったが、状況が状況だった。

「ごめんなさい。こつちに時間がかかりそうなので、残念ですが、私は行けそうにないです」

「そうですか……わかりました！ 頑張ってくださいね、あやせ先輩！」

「うぐつ……はい、ありがとうございます……」

純粋な応援の気持ち胸に突き刺さる。騙したいわけじゃないのに……

やがて、千咲さんが学生会室から離れ歩いていく音が聞こえた。

（でも、これで少なくとも千咲さんに七海さんは寮の方にいることになる。恐らくけど、いつものみんなも……）

校舎内に人はなるべくいない方がいい。なにせ、誰にも今の姿は見られてはいけないのだから。

「よしっ」

私は小さく決意すると、更衣室へ向けてゆっくりと周りを確認しながら学生会室を出た。

「はあ……よし、もうちよつと……」

私は、なんだかんだでもう少し、というところまで来ていた。元々放課後でほとんど人がいなかったのと、制服自体は着ているわけで、髪で隠せばなんとかなった。

……まさか長い髪で良かったとこんな瞬間に思うとは。なんだか腑に落ちなかった。

（それもこれも全部変なこと言い出したやつのは絶対ぶつ殺す……！ ああー思い出したらムカムカしてきた！ 最初に言い出したやつは絶対ぶつ殺す……）

そんな怒りと、だんだんと油断してきていたのが悪かったのか、角を曲がった瞬間、人影とぶつかってしまった。

「きやつ！」

「っ!? い、てて……」

「ご、ごめんなさい……」

「いや、俺も前を見てなくて、悪かつ……た……三司、さん？ その胸は……」

「ツッ！」

すっかり油断していた。ぶつかって、怪我をしなかったのは良かったが、胸をガードしていなかった。

「ちちちちち違うんです！ これはその！ そう！ サラシを巻いて撮る撮影がー」

「落ち着け！ 俺だ！ 在原暁だ！」

「だからほんとにちがくてーって、在原、君……？」

ぶつかったのは、在原君だった。

「ああ、良く……はないけど、最悪の事態はセーフ……」

「何を言っているかわからないが……その、どうして胸が小さいんだ？」

「……イラッ」

「まさかあの三司さんが盛り忘れるなんてことはないと思うが……まさかパッドを落としたのか!？」

「……ブチン」

「俺でよければ、三司さんのパッドを探すのを手伝うぞ？」

「ッ！ パッドを盛り忘れた！ 胸が小さな私が！ 歩いてて悪い!! 貧乳に人権はないと言っても言いたいのか!？」

「待て！ 落ち着けて！ そんなに大きな声を出したら他の人にバレるぞ!？」

「ぐっ……ぐぬ……ぐぬ……!」

その後、無事かどうかは置いておいて、在原君に事情を説明し、回収はできた。

「暁君、今週末って何か予定あるー？」

「ああ、悪い七海。ちよつと予定がな」

「……珍しい。何かするの？」

「俺の奢りでご飯に行くだけだ」

「……本当に珍しいね。頭でも打った？」

「……軽く頭を打ったくらいで許して貰えると嬉しいかな」

「えー……」

## 専属メイドあやせちゃん

「お、おかえりなさいませ、ご主人様……」

「……………すまん、間違えた」

「間違えてない！ ちよつと待つてよ！」

あやせにメールで呼ばれて、あやせの部屋を開けたはずだが、そこに居たのはメイド服に猫耳まで着けた女の子だった。

「そういう趣味があつたんだな」

「だから違うつて……苦渋の決断よ……」

とりあえず俺はあやせの部屋に入れてもらつて座らせてもらうと、あやせは経緯を話し始めた。

「さつきみんなと話してて、私と暁の話になつただけどそこで色々聞かれちゃつて……」

まったく脈絡がつかめない。その聞かれたということと今あやせがメイド服に身を包んでいることとどう関係があるのだろうか。

「その、いつもどういうデートしてるんですか、とか、話しててどういうプレイ？ して

るんですか、みたいな話になって……」

話しているうちに段々あやせの顔が赤くなって俯くようになっていく。

どうやら皆からだいぶ深い質問責めにあっただらしい。

「それで私が進んだ前でもメイド服を着るか、暁と二人の時でもいいから着るか、みたいな話になっちゃって……」

「いや、すまん。全然脈絡が掴めない」

「とにかく！ 暁は私と写真を撮ってくればいいから！ それで許してくれるみたいだし……」

……今度あの4人にはなにか言っておこう。なんだかんだ全員乗り気になっていそうな場面が頭に浮かんだ。

だが、正直あやせのこういう格好が見られたことは感謝するべきところでもあった。

「でもその格好、可愛いな」

「っ!? 本当に恥ずかしいんだからね!」

顔を真っ赤にして恥ずかしがるあやせ。……本格的に少し弄りたくなってきたぞ。

「写真はいいが、折角だしメイドさんらしくお願いしてもらわないとな」

「なっ!? このお……!」

「こちらを睨むあやせを横目に、ニッコリと笑顔を向けてやる。

「くっ………わかった。わかったわよ！ やればいいんでしょ!？」

「ああ。頼む」

俺の一言に、あやせが口を紡ぎながらも何かを決意したかのように息を吐く。

そして、『みんなの三司あやせ』の笑顔を作る。

「ご主人様。一緒に写真を撮ってけると嬉しいな」

「……」

相応色々な感情を押し殺しているのだろう。語尾にハートがついているような感じではあっても、口の端が引きつっていたり、後で覚えてると言わんばかりのオーラが出ていたりした。

(ここまできたら、どうせ怒られるから一緒か)

そう思った俺は、さらに提案を試みることにした。

「猫耳もつけてるんだし、語尾も変えてみたらいいんじゃないか？」

「……いい加減にしなさいよ」

こわいこわい。作った笑顔を貼り付けながら、あやせは抑揚のない声でそう言い放つ。

「そうか。俺は見てみたかったんだが……残念だ」

「ちよつと、そんな顔しないでよ……あーもう、わかった！ どうせ恥ずかしいのは変わ

らないし、やってあげるから!」

「ありがとうあやせ。好きだぞ」

「ほんつと、調子いいんだから……」

文句を言いながらも、渋々やってくれようだ。

(なんだかんだ、いつもお願いするとなんでもしてくれろんだよな)

あやせはまた少し息を吐いて間をおくと、こちらに振り向いた。

「ご主人様あ? もし良かったらあやせと一緒に、写真を撮って欲しいニヤン」

「……………ぶふっ」

「あつ! ちよつと、何笑ってんのよ! 本当に恥ずかしいんだからね!」

俺の予想を上回る入り込みっぷりに、思わず吹き出してしまった。

「あゝもう! なんで私がこんな辱めを受けなくちゃいけないのよゝゝツツ!」



## 梅雨の一日（あやせ）

「ぐっ、ぬぬぬぬぬ」

「なああやせ、そろそろ諦めた方が……」

「それはダメ！ ゼツタイにこいつを倒してから行くんだから！」

休日の昼下がり。今日は雨が降っていたのであやせと俺は部屋で遊ぶことにした。

部屋でゲームをするだけでも、あやせと一緒に居られれば十分に楽しい。不満はない、のだが……

「そいつは倒さなくても良いんだろ？ だったら他のところから——」

「それじゃあ私の気が収まらないの！」

あやせの負けず嫌いにも困ったものだ。かれこれ1時間ほどはもう同じ場面を繰り返し見ている。昔に買ったが良いがクリアできていなかったゲームを、折角だからといつも通り俺がプレイしていた。俺がやっているのを見てか、あやせが珍しくやりたいと言うのでボス戦でコントローラーを手渡したのが間違いだった。

「せめて二人プレイにしよう。そうしたら勝てるかもしれないだろ？」

「……わかった」

俺の提案を渋々といった調子で受ける。妥協案だが、受け入れてくれて良かった。あれだけ見ていれば、敵のパターンは頭に入っている。

——数分後。

「よし。勝てたな」

「……私死んでたけどね」

どうしても苦手なのか、わかってはいるのだろうが死んでしまうあやせ。

「クリアはできたからいいじゃないか」

「……………」

どうにも納得できない顔で黙り込む。

……正直、これ以上同じ場面を見るのは飽きてしまったのだが。

「……じゃあ、次のやつは私が倒すから」

「わかったよ」

何とか受け入れてくれたようだ。俺は、次のボスが弱いことだけを祈ってもう一度コントローラーを握った。

「……………無理」

「……だろうなあ」

さらに数十分後。そこには俺が一応渡したコントローラーを力なく床に置くあやせがいた。それもそのはず、敵がネコ型のボスなのだ。しかも割と可愛くデフォルメまでされて。

「これはずるいじゃない!」

「まあ、無くはないよな」

「やめやめ! いくらゲームでも、こんなに可愛い猫ちゃんを倒すのはダメ!」

そういうと、ゲームを切ってしまう。あやせの前では、今後このゲームがクリアまで行けることはないだろう。

「さて、どうしよっか」

「雨止まないな」

二人して窓の外を見る。梅雨の時期ということもあつてか、雨はざあざあと降り続いてた。

「暁」

「どうした?」

ぼうつとしたまま数分後、あやせが話し出す。

「私を、好きになってくれてありがとうね」

「……どうした、急に。雨でアンニユイになつてるのか」

「つ……茶化さないでよ。本当に、感謝してるんだから」

真面目な顔で言つたかと思えば、軽く俺を叩いて顔を赤くしそう言うあやせ。

……真面目な顔が綺麗で、つい茶化してしまつたことは隠しておこう。

「暁が来てから、私もその周りのことも変わつた。命を助けてもらつたし、みんなともつと仲良くなれた。それにお姉ちゃんのことも——」

「それはあやせが頑張つたからだ」

あやせの言葉を遮つて言う。

「俺がいてもいなくても、あやせはきつと上手くできたさ」

「……でも、暁がいなかつたら私は今こんなに幸せな気持ちじゃなかつた。そうでしょ？」

俺の顔をしっかりと見てそう言い切る。本当にどうして急にそんなことを言われているのかはわからないが、その目には俺への気持ちがいっぱいこめられていた。

「ああ、観念するよ。どういたしまして」

「うん。最初からそれで良いのよ。アナタはもう、私のものなんだから」

……ひどく強引だ。だが不思議と、そんな彼女も愛おしく思える。

「わ、私も、アナタのものなんだから……」

あやせはそう言って俺の胸に顔を埋める。少し言葉に詰まっているところがまた可愛らしい。

「えいつ」

「っ……!?!」

あやせに押し倒される形で、俺は床に仰向けになる。

「ねえ、暁……」

俺を見るその目と小さな声は、何度も見て聞いているがいまだに慣れない、熱に浮かされたものだった。

## 外部取材（あやせ）

「……取材？」

「そう」

昼休みの学生会室、あやせが今度の週末にあるという取材のことを話し出した。

「日帰りなんだけど、少しだけ遠いところなのよね」

「どのくらいだ？」

「驚逗市内じゃないから、電車で……1時間くらいかな」

「それは大変だな」

時々だが、休日にもこうしてあやせの取材が入ることがある。だが驚逗市から出てま  
でとなるとなかなか稀だ。

「それで、取材内容はそんなに大変じゃないみたいだから基本的に行くのは私だけなん  
だけど、別に人が付いてきても良いみたいなのよね……」

「こちらをチラチラと見ながらそう言うあやせ。流石の俺でも言いたいことがわかっ  
た。」

「俺が付いてくよ」

「ほんと？　ありがとう♪」

「……………」

「なんでそういう微妙な顔をするのよ」

「いや、別に」

（よし。取材とはいえ、暁と二人つきりで遠出するんだから、これはデートよね！）

私は、自分でもわかるくらいの上機嫌で部屋にいた。

休日の取材、しかも遠出となると中々気が重いけど、暁と一緒にいる、しかも二人きり、というだけで私のテンションは上がってしまっていた。

（はあくあ……やつぱり大好きなんだなあ……）

取材当日。俺はあやせのボディガードとなるべく、先に軽く場所と取材先の建物の下調べをしておいた。七海にはそこまでしなくて良いんじゃないかなあと言われたが、あやせがわざわざ頼んできたのだ。誘拐されそうになったこともあるし、不安なのだろう。

（でもあのくらいなら、俺一人でも大丈夫だな）

確認した限りでは場所にも特に問題なく、心配するような直近の案件もなかった。ア

ストラル規制派自体も事実上解体された。そこまで気を張る必要はないだろう。

「……る！ 暁！」

「ん、ああ、悪い。考え事をしてた」

「もう……今日はずっとそんな感じじゃない？ 体調悪いの？」

「いや、大丈夫だ」

「ならいいけど……」

あやせにまで心配されてしまったては元も子もない。俺は考えを改め直すと、周囲への警戒を再び始めた。

「ね、暁……？」

「……大丈夫だ。ちゃんと俺が周りを見てる。心配することはない」

「いや、そうじゃなくって……」

「……？」

あやせが、何やら言いたそうにしている。今日はずっと周りを気にして、取材場所までももう少しだ。問題はないはずだが……

「今日の暁、やっぱりなんかおかしい」

「そうか？ 至って普通のはずだが」

「それがおかしい。普通じゃない。私と暁、二人つきりでしょ？」



「ああ。だからこそだ」

二人つきりだからこそ、周りを気にしてあやせを守るようにしている。ボディガードとして普通のはずだが……

「……なんか、私だけそわそわしてない？ ずるい」

「ずるいつて……」

何故だか、微妙に話が噛み合わない。そんな今日の行動に問題があったのだろうか？  
そうこうしているうちに、取材場所に着くのだった。

「今日は、よろしくお願いします」

「はい、よろしく願います」

取材が始まる。それでも、私の頭の中は暁のことदैっぱいだった。

(……やっぱりおかしい。ここに来る途中だつて手も繋いでくれないし、私じゃなくて周りばかり見てるし……)

「ーそうですね、そういうこともあります」

「なるほど。それで、橘花学院の体制についてですがー」

(なんか、考えてたらモヤモヤしてきた……私ばかり好きみたいじゃない……暁めえ

……)

とはいえ取材もちゃんとしたお仕事。なるべく気を逸らさないように意識してはいたのだが、頭に浮かんでできてしまうことは止めようがない。

「三司さん？ 大丈夫ですか？」

「あ、はい。すみません、大丈夫です」

「連続でお話を聞いちゃってますからね。少し休憩にしましょうか。5分後に再開でも大丈夫ですか？」

「……はい。ありがとうございます」

記者の人にまで気を使われてしまつて、休憩になる。

（あれもこれも、暁のせいなんだから……）

既に頭の中が暁でいっぱいだった私は、廊下に出ると無意識に携帯を取り出し、電話をかけていた。

『ん。もしもし？』

「あつ、暁？」

『どうした。取材は終わったのか？』

「ううん、今はちよつとした休憩中」

『わざわざ電話してくるなんて、なにかあったのか？』

「別に、何もないけど……」

ハッキリと言えない自分が嫌になる。暁はそういうところが鈍いんだから、私から言ってしまうわないと……！

『そうだ。せっかく驚逗市から出たんだから、帰りはデートでもしないか？』

「えっ……？」

『急に悪い。あやせと二人きりっていうのだと、どうしても意識しちやつてな……』

「……う」

『都合が悪かったか？ それとも、帰ってからまだ仕事があるとか……』

「う、ううん！ いい。それで、いい。デート……する」

『そうか、良かった。時間は大丈夫か？』

「あつ、うん……じゃあ、取材、頑張る……」

「おう。応援してるぞ」

電話が切れる。私はほんの数秒だが、固まってしまったかのように動けなかった。

「……………ずるい」

ポツリとつぶやいた彼女の声は、静かな廊下にいやに響いた。

本当にずるい。鈍いなら鈍いで、そのままだったら良かったのに。

「三司さん！ そろそろ大丈夫ですか？」

「えっ、あつ、はい！ 今行きますね」

その日の取材写真には、とびきりの彼女の笑顔が写されていた。

## あやせとの休日

「あ、ちよつと！ クッキー食べたでしょ!? 取つといたのに!」

「悪い。食べて良いやつかと思つて」

今日は休日。俺とあやせは、二人でゲームをして遊んでいた。

「まあ、いいけど……はーあ、それにしてもやったわねえ。ちよつと休憩しない?」

昨日発売した、協力プレイできるといいうゲームを二人してプレイしていたら、ゆうに数時間が経過していた。

最初こそあやせに付き合うような形でゲームを始めたが、これがなかなか楽しい。後半はあやせを付き合わせるような形にすらなっていた。

「俺はもうちよつとやるよ。これだけクリアしたい」

「そう? じゃあ悪いけど、私はちよつと休むわよ」

あやせはそういうと、自分のベッドに仰向けで寝転がった。

画面に視線を戻す。ゲーム自体の難易度はあまり高くないが、それでも油断するとすぐに死んでしまう。それ故に、集中してプレイしている俺は時間の感覚がすっぽりと抜けてしまっていた。

「……ねえ」

「……」

「ねえつてば。さーとーるー」

「……ん？」

あやせの声が聞こえてくる。だが、ゲームで戦いつつも会話するのは意外と難しい。アストラル能力を使ってしまえばそれまでだが、わざわざこんなことに使う必要もないだろう。

「そんなに楽しい？」

「ああ」

集中しているせいか、会話がぶつきらぼうになってしまう。

「そうなんだ」

あやせの方もそれ以上会話を続ける気がなかったのか、部屋にはゲームの音だけが響く。

気になってちらつとあやせの方を見ると、姿勢がうつ伏せになっていて、腕を枕にこつちを見ていた。

「……どうかしたか？」

「……んーん。なんでもない」

どうやら、ぼうつとこつちを見ているだけのようだ。あやせも必要なら言葉に表してくれるタイプなので、俺もそれ以上聞かないことにした。

「ふうつ。これくらいにするか」

ゲームで一区切りがついて、画面から顔を上げる。

「どのくらい経った？」

「うん？ うーん……あ、1時間半も経ってる」

「そんなにか」

俺も改めて時計を見ると、時刻はすでに夕食の時間が近づくくらいだった。これだけは、これだけとは思いつつ結構やってしまっていたようだ。

「夕食行く準備しないとな」

「そうね」

結局気になった俺はあやせの方を定期的に横目で見ていたが、態勢が変わってもずつと俺の方を見ていた。

「あやせ、何かあったか？」

「えっ？ 何もないわよ？」

夕食に行くため部屋を軽く片付けているが、あやせはどこかぼうつとしていた。気になって聞いてみたが、本人も別に意識していなかったらしい。キョトンとした顔で返されてしまった。

「それじゃあ行くか」

「うん」

部屋を出て、食堂へと向かう。その間もずっとあやせは何か考え事をしているようにぼうつとしていた。

「なにか悩み事か？」

「どうしても気になってまた聞いてしまう。」

「悩みってほどじゃないんだけど……うーん……」

さっきの悩みより、言葉にして俺に伝える悩みの方が大きいのか、あやせは目に見えて悩み始めてしまった。

「なんていうか……自分の感情がわからないっていうか、なんの気持ちなんだろうな、って」

「さっきベッドでぼうつとしてたやつか？」

俺がゲームをしている間、ずっと俺の方を見ていたあやせを思い出してそう言ってみる。



「そう。最初は疲れたーと思って休んで、少し経ったら暁がゲームに熱中しているのが珍しくて面白いなー、って思ってたんだけど途中からなんかもやつとし始めちゃって」

「もやつと?」

「うん。自分でもなんでそうなったかがわからないから考えてたの」

「もやつと……か。ゲームに嫉妬でもしてたんじゃないか?」

あやせに限ってそんなことはないだろうと思いつつも、冗談めかした口調でからかってみる。

「嫉妬……ゲームに……」

だが、反応は意外に静かなものだった。俺の言葉を繰り返して、あやせがまた悩む。自分の中で整理しているらしい。

「嫉妬、かあ……そうかも……途中からは暁を取られちゃってもやもやしてたのかも」

「えっ……?」

今度は、俺の方がキョトンとしてしまう。

「ありがとう暁。スッキリしたし、早くご飯行くわよ!」

先ほどと打って変わって元気になるあやせ。先に階段を降りて食堂へと行ってしまふ。一人になった俺の頭には、先程のあやせの言葉が繰り返し流れていた。

食事中、自分の発言と出来事を思い返して顔を真っ赤にしたあやせに「……さっきのは忘れて」と言われたことは忘れないでおこう。

## 広報活動

「うー……」

「……」

「んー……」

「……」

少し前から、ずっとこの調子だ。

うんうん唸ってはスマホと向き合っている。

「あー……どうかしたのか？」

「うーん……どうかした、ってほどじゃないんだけど……」

あやせのスマホを覗き込んでみる。

画面には、いくつかのメールが映っていた。

「最近、取材の服装指定がおかしい感じがして」

「と、いうと？」

このままでは二人きりでゆったり過ごす予定の休日が唸って終わりになってしまふ。

俺はあやせの話を聞いてみることにした。

「なんか、衣装を着て写真を撮る、っていうのは前からあったんだけど」

「広報服だったり、水着の写真も撮ってたよな」

「そうそう。最近はコスプレみたいなものもあるのよねえ……」

「例えば？」

「……メイド服？　みたいなの、とか」

思わずあやせのメイド服姿を想像してみる。

……良いな。

「——良いな、とか思ってたない？」

「あー……少し」

否定するのも違う気がして、そう返事をした。

「こっちは大変なんだからね!？」

「……悪い。だが、そういう依頼は一回学院を通してからあやせに来るんじゃないのか」

「？」

「……そう、なんだけど」

なんとか話は逸らせたようで安心した。

若干納得していないようではあったが。

「取材に慣れてきて感覚も鈍ってるのか、最近は特に気にしないで私も着ちやっつて」

「なるほど」

言われてみれば、広報服も割と目立つデザインだ。

あれを毎日着ていたら、そこらへんの感覚もやっぱ鈍るのだろうか。

「それは、何か気づくキツカケでもあったのか？」

「……………ねが」

「ねが？」

「……………胸が、その……………」

「……………あー」

「あーってなによ!？」

服を着替えるときには、当然パッドも気にすることになる。

それがキツカケで気づいたのか…………

「なんか、悲しいな」

「ツ！ 悲しいなっってなによ！ 私の胸がそんなに悲しいか！ 乳が無けりや悲しいのか

!! ああ!？」

「いやっ！ 待て、落ち着け！ そういう意味じゃない！」

あやせに火をつけてしまった。

なんとか落ち着かせようと、肩を掴んで訴えてみる。

「つ、とにかく！ 服によつては色んなタイプがあるの！ だから、それで……色んなタイプがあるのか。」

そこらへんの事情は知らなかったが、相変わらず苦労してるんだな……  
そして、さすが詳しい。

「……なんか、凄く失礼なことを思われてる気がするんだけど」

「そんなことはない」

口にしなくて本当に良かった。

「はあ……今回ののは、断る。最近取材自体も多かったし」

「それがいい」

今日二人でいられるのも、あやせの取材が久しぶりに無かったからだ。

先週も、その前の週も休日は取材の予定で二人きりでゆっくりとはいかなかった。

「ここのところは随分取材が多かったからな」

「今、学院の特集に力を入れてるらしくて。自然と私の方も多くなるのよねえ……文章考えるのももう限界。お姉ちゃんに代わってもらおうかな？」

「それは……無理だろ」

琴里さんのことを思い起こす。

確かに美人ではあるが……あの人は、またあやせとも違ったタイプだろう。

勝手なイメージだが、文章を考えるのが得意、というタイプでもなさそうだ。

「学院側にも伝えてみたらどうだ？」

「うーん……そうしてみよう、かな」

正直広報活動もやめてしまえばいい、と思ったこともないわけではないが、あやせは『アストラル使いの為になるなら、もう少し続けてみたい』と言っていた。

それなら、俺にできるのはせめてそれを応援することだろう。

「とりあえず、今日はゆっくりしよ。ありがとね」

「俺は何もしてない」

「……いつも、助けてくれてる」

あやせが体を預けてくる。

こういう親密な関係になれたのも、考えてみればあやせが広報活動をしてくれていたおかげかもしれない。

そう考えると、二人きりになれなかった悔しい気持ちも少しは紛れるようだった。

「暁は、私と二人で嬉しい？」

「ああ」

「……即答」